

東京大学東アジア藝文書院

活動報告書

2023

The Annual Report of
East Asian Academy for New Liberal Arts



石井 剛

(東アジア藝文書院院長)

し合っているのが、わたしたちの強みです。わたしは世界の人々と共に生を分かちあうことのできる空気を醸成していることに実感を覚えています。

「空気の価値化」が研究プロジェクトに加わったことも2023年度の新しい動きです。わたしたちは、研究・教育・社会連携が三位一体となることによって新しい学問の形を示していこうとしています。このプロジェクトの設置によって、わたしたちは大学の外に広がる社会の方々との対話を進めることができるようになりました。

空気はわたしたちの生物圏と社会関係の隅々にまで浸透し、すべてをつなぎながらそこに棲まう生命を養っています。希望もまた同じようなものにちがいありません。それは決して目に見えるものではありませんが、あらゆる場所に通じながら、そこに棲まう人々に生きる喜びをもたらします。

皆さまのお力をお借りしながら、希望を育て、広げていくこと、それが東アジア藝文書院が目指す「東アジアからのリベラルアーツ」の役割です。

支援者の方々にこの場を借りて心からの感謝を申し上げます。

いつのころからか定かではありませんが、思えばわたしはしばしば「希望」ということばを口にするようになりました。それはもしかすると、昨今の時代の雰囲気や複合危機と呼ばれる難しい局面の中にあることに反応しているからなのかも知れません。しかし、それ以上に、わたしは、東アジア藝文書院という存在そのものに希望ということばがふさわしいからであろうと考えています。

2023年度、わたしたちの活動は2019年の発足以来、初めて本格的に国際的な研究・教育交流を存分に展開することができました。言うまでもなく、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって長らく滞っていた往来がようやくかつてのにぎわいを取りもどし始めたからです。世界各地から多くの学者がわたしたちを訪ねてくれましたし、わたしたちもまた、彼らを訪ねていくことができました。世界との道が何本も交錯しながら広がっていくことはまさに希望が確かなものになるプロセスです。また、学生交流も盛んに行われました。北京大学との相互交流のみならず、清華大学やソウル国立大学からの訪問もありましたし、さらには、高校生の皆さんが大学生活を知るために訪れてくれる場としても

EAAは選ばれるようになっています。人類の次の世代を担う学生たちが育つ場が国際的な研究交流と交錯



山口潔子 画

東 アジア藝文書院の大きなプロジェクトの一つ、潮田総合学芸知イニシアティブでは、東アジアの「アート」（総合学芸知）に対する包括的な理解と新たなアプローチを目指し、2023年度はさらに研究活動を拡大してきた。藝文学研究会を全18回開催し、禅宗・中国音楽・開発学・美術史・美学・服飾史、さらにはまちづくりや日本の外国人政策などのテーマを取り上げた。そして、これまでの総括といえるシンポジウム「ともに成り行く道、ともに花する世界：東アジアから考えるHuman Co-becomingとHuman Co-flowering」を開催したほか（2023年11月26・27日）、専任研究員・若手研究者による個別のイベントも多数実施されている。EAAが培ってきた北京大学を含む国際的な学術ネットワークを存分に活かしながら、伝統と現代を架橋する視座に立ち、東アジアの思想・技芸・文化・社会に対して総合的な研究を行うとともに、その成果として「ともに花する（Human Co-flowering）」学問・総合学芸知をEAAから世界に発信していく。

講演と演奏「中国の思想と音楽の美」



千葉県長生郡一宮町の正法山明法院本堂にて、馬淵昌也町長による講演「陽明学の知行合一について」、そして一般社団法人日本古琴振興会のメンバーによる七弦琴の演奏が行われた。町民の方も数多く参加し、音楽・儒学・社会のつながりについて考えた。



藝文学研究会シンポジウム

ともに成り行く道、ともに花する世界：東アジアから考える Human Co-becomingとHuman Co-flowering

東京大学東アジア藝文書院 (EAA) 藝文学研究会主催シンポジウム

ともに成り行く道、ともに花する世界

東アジアから考える Human Co-becoming と Human Co-flowering

【日時】 11月26日(日)13時～16時 / 27日(月)14時～17時
 【場所】 26日：東洋文化研究所大会議室
 27日：東洋文化研究所第二会議室
 【言語】 日本語
 【開催方式】 対面（関係者のみ）

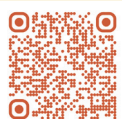
11月26日(日)

13:00-13:15 開会の辞：中島隆博（東京大学東洋文化研究所所長）
 13:15-13:45 「知にのみ憑拠としての神韻の『遺物』：社会的な喪失といわぬかたち」（坂本雅光 / 東京大学東洋文化研究所教授）
 13:45-14:15 「聖徳と金丹：禅宗・全真教・内丹道の目指すところ」（松下道信 / 京学館大学教授）
 14:15-15:00 休憩
 15:00-15:30 「神の御方とその仏とよびあひく道」（藤原謙 / 東京大学東洋文化研究所准教授）
 15:30-16:00 「人となる第一歩としての感覚：孔子のふるまひの美学」（田中育紀 / 東京大学東洋文化研究所准教授）

11月27日(月)

14:00-14:30 「開発と結びつき：中国の肉食大団化にみる共生と相克」（汪毅軒 / 東京大学東アジア藝文書院特任研究員）
 14:30-15:00 「『国難』人間関係における人間のあり方」（丁之 / 日本学術振興会外国人特別研究員）
 15:00-15:30 「『おれ』ゆえにときに『シンプン』を律するが：人文学の実践的意義を問う」（崎濱紗奈 / 東京大学東アジア藝文書院特任助教）
 15:30-15:45 休憩（15分）
 15:45-17:00 総合討論

EAA 東京大学東アジア藝文書院
 UTA 潮田総合学芸知イニシアティブ The Utsunomiya Initiative of Arts



単独の学問領域だけでは答え難い課題に対し、様々な分野の研究者が協力して研究を行なう学際的な研究を、単なる「寄せ集め」にしないためにはどうしたらよいか。それに対するひとつの答えが、対話を重ねてお互いを理解し共に変わっていくという道であり、本シンポジウムのテーマ「ともに成り行く道、ともに花する世界」である。1日目は東アジアの伝統思想を構築してきた儒道仏の三教と美術を取り上げた。人間の思想を伝達する上で重要なのは、テキストよりも「かたち」なのではないか。人は悟った後、それでも続く人生において、教導ではない形で、人々どう交われればよいか。自利と利他が結びつき「自他ともに仏となる」とはどのようなことか。これからの世界に必要な人間のありかたをめぐり、様々な解釈を提示する試みを行った。また2日目は現代的な視点から、開発・美学・辺境の問題に取り組む研究者がそれぞれ発表した。「構造的暴力」の中で生きることに耐えながら、異なる欲望のあり方を可能にするための藝文学の役割、「情」に立脚しながらも一種の普遍的な妥当性を有する理想的な人間のあり方を提示する王国維の思想、沖繩学の生成と展開を手がかりにした人文学の実践的意義などが議論された。最後に中島隆博氏（EAA）が「境界」というキーワードを提示し、2日間のシンポジウムの諸発表を総括的に俯瞰し、計6名の発表者の相互に対する質疑応答も多角的に行われた。本シンポジウムでは歴史や今日の様々な実践を通して、複合危機の時代を生きるために、他者と関わり変容していくことの大切さと具体的なアプローチが再確認された。

2023年日中韓朱子学学術検討会

2023年中日韩朱子学学术研讨会

中国・北京 2023.11.3-5



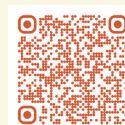
EAAと清華大学人文学院哲学系によって共催された国際シンポジウム。コロナ禍を経て、久しぶりに開催された朱子学に関わる大規模な国際会議となった。東京大学・清華大学のほか、北京大学や高麗大学など、若手研究者を中心に日中韓の数多くの専門家が参加した。



EAA研究会「東アジアと仏教」



シンポジウム「日本における宋代禪の受容と展開」(第5回研究会)では、東アジアに多大な影響を及ぼした宋代禪について、日本での受容と展開に焦点を絞り、柳幹康氏(EAA)、張超氏(PSL研究大学フランス高等研究実習院)、ディディエ・ダヴァン氏(国文学研究資料館)が研究発表を行い、参加者とともに活発な議論を行なった。また講演会「フランスにおける中国宗教研究」(第6回研究会)では、張超氏が、中国学(漢学)のサブ分野としてルーツを持つ、フランスにおける中国宗教研究の過去と現在について詳細に論じた。

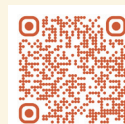


EAA国際シンポジウム

東アジア前近代の地域社会：比較史研究の方法と史料



黄霄龍氏(EAA)が司会を担当し、中国の明清地域・区域社会史研究者の趙世瑜氏(北京大学)と賀喜氏(香港中文大学)、日本地域史研究者の湯浅治久氏(専修大学)が報告し、コメンテーターとして明清史研究者の岸本美緒氏(東洋文庫)をお迎えした。日中の地域史に関心を持つ研究者が多数参加した。



東 アジア藝文書院は単なる研究センターではなく、教育プログラムと産学連携を行う組織でもある。「東アジア教養学理論」や「東アジア教養学演習」などの授業では、古今東西のクラシックスの批判的講読と英中日三言語による議論の場を提供している。また、学術フロンティア講義「30年後の世界へ」では、グローバルな気候変動という危機をふまえ「空気の価値化」について検討している。東京大学・北京大学の相互の留学派遣事業にも力を入れており、両大学の間で、教員と学生が活発に交流することで、大学の枠を超えて新しいリベラルアーツを共に創出することを目指している。キャンパス内で学問を追求するのみならず、フィールド学習を通じて、環境問題や社会問題にまつわる現場をめぐることも大事にしている。現在、世界は様々な危機に直面しているが、それを無視せず、希望に変えていくための学問の可能性を模索しながら、人間の友情が世界に変革をもたらすことを期待している。

学術フロンティア講義

30年後の世界へ——空気はいかに価値化されるべきか

2023 S semester 学術フロンティア講義

30年後の世界へ——
空気はいかに価値化されるべきか

場所: 21KOMCEE East K011 定員: 全曜5限

4月7日	ガイダンス
4月14日	花する空気 中島 博博 (東洋文化研究所/東アジア圏文書院)
4月21日	資本主義と空気の価値～市場・国家・社会的共通資本～ 安藤 祥雄 (早稲田大学)
4月28日	時間をあたえあう—タンザニアの零細商人の贈与論 小川 幸平 (立命館大学)
5月19日	「空気の価値化」を通じて考える「知の価値」 五神 真 (理化学研究所理事/東京大学前総長)
5月26日	空調メーカーが試行している空気の価値化 香川 謙吉 (ライオン工業株式会社)
5月29日	現代アートにおける空気の可視化 山本 浩貴 (金沢美術工芸大学)
6月9日	建築と空気 川原 善行 (東洋建築研究所)
6月16日	ステイクホルダー価値を軸とした企業社会のパラダイムシフトと空気の価値化 飯田 一郎 (工学系研究科)
6月23日	ひとと空気の歴史社会学: 空気にも歴史がある 佐藤 健二 (東京大学大学院 経済学)
6月30日	空気が商品になるとき—炭素税、CCS、ジオエンジニアリング 高橋 幸 (東洋文化研究所)
7月7日	グローバル・ commons を守り育むために 石野 聖雄子 (東京大学経済学)
7月14日	空気の哲学としての新しいリベラルアーツへ—責任と希望の学問 石野 剛 (東洋文化研究所/東アジア圏文書院)

EAA 東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS

2019年度のEAA発
足以来、「30年後
の世界へ」をテーマ
に毎年オムニバス講
義を開催。2023年
度は「空気はいかに
価値化されるべきか
」という問いのもと、
価値概念の見直し
から始め、万物の
よりよき共生的関係
を可能にする社会経
済システムについて
考えた。



Summer Institute 2023



「Intimacy and Feeling」というテーマのもと2023年9月3日～5日の3日間、北京大学元培学院にて実施。東京大学の学生9名と北京大学の学生12名が参加。王欽氏 (EAA) と星野太氏 (EAA) による講義に続き、両校からの参加者で混合編成された6つのグループが各々研究発表を行った。



山中湖フィールドトリップ



2023年12月9日～10日に実施。教室から離れ、自然の中で「イロニーとしての近代と廃墟としての自然」を考える機会を提供することを目的として企画された。「ロマン派はわれわれの無邪気さである」というジャン＝リュック・ナンシーの言葉を背景に、純粋な「自然」や「古典」への回帰が、現代社会においてどれだけ可能であるか、そして資本主義の影響を受けた近代がその可能性にどのように影響を与えているかについて考察した。



ダイキン東大ラボ後援 EAAトークシリーズ

アートを通じて空気をする (Doing Air through Arts)

現代アートから見える空気をテーマにした一般公開のトークシリーズ。毎回現代アーティストや美術批評家などの方々を2名ずつ招き、人々の意識の裏側にある空気や「空気をする (doing air)」体験について講演・対談して頂くことを意図した企画。2023年10月から2024年1月にかけてハイブリッド形式のセッションを計5回開催。各セッションのテーマは「映像」「バイオアート」「電子音楽」「インスタレーションアート」「食」。アーティストの方々には、ご自身の作品を紹介して頂くとともに、それらに織り込まれた(雰囲気や空気感を含む)空気についてご議論頂いた。社会人を含むより広い層の方々が参加できるように、全セッションを夕刻に設定。駒場IIキャンパスや八重洲アカデミックコモンズにも会場を移しながら開催した。



パフォーマンスを芸術家の水内義人氏(左)と本学の中井悠氏(右)
(2023年12月6日開催)



発表・対談する美術家の大岩雄典氏(左)と
EAAの星野太氏(右)
(2023年12月22日開催)



ゲスト・スピーカーの百瀬文氏による映像作品を上映
対談相手は文化研究者の山本浩貴氏
(2023年10月26日開催)



現代アーティストのAKI INOMATA氏による発表
対談相手は生命を巡る科学、思想、芸術に関わる表現並びに研究のためのプラットフォームmetaPhorestの主宰者である岩崎秀雄氏
(2023年11月6日開催)



発表・対談する現代アーティストの永田康祐氏(左)と
文化人類学者の藤田周氏(右)
(2024年1月18日開催)



共生会議

バーグルエン中国センター主催・EAA共催の共生会議 (Gongsheng/Kyōsei and Convivialism: Forging a Planetary Philosophy and Ethics?) が2023年3月28日～29日の2日間、東京大学駒場キャンパスにて開催された。シンポジウムでは英語、中国語、日本語という三つの言語が使用され、「共生」というテーマをめぐって様々な角度から重厚な議論が展開された。



総合文化研究科長の真船文隆氏が開会の辞を述べ、バーグルエン中国センター主任の宋冰氏が本プロジェクトの背景を紹介した。中島隆博氏 (EAA)、アラン・カイエ氏 (パリ第10大学)、マルクス・ガブリエル氏 (ボン大学) による三つの基調講演のほか、宮沢賢治や老子・荘子の共生観、人間と非人間の共生、共生にとつての「復興」の意義、「共生」から「寄生」への概念的転換など議論は多岐に渡った。最後に行われた本学名誉教授の小林康夫氏の講演では、共生概念を自明のものとし、議論の可能性が問われ、科学と技術が圧倒する現代にどのように新しく思考するのか、問題提起がなされた。活発な議論で冷めやらぬ余韻の中、バーグルエン研究所所長のニコラス・バーグルエン氏による挨拶によって閉会した。

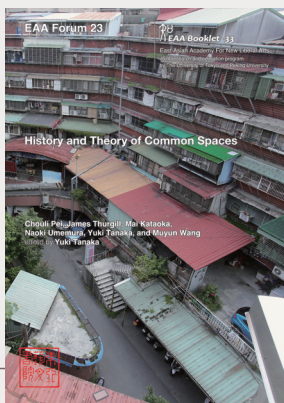
Publications



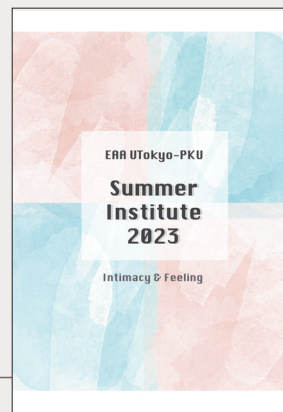
EAA Scholars Collection No.1
王欽著『悬而未决的主权决断——论卡尔·施米特及其他』
2023. 5. 1



EAA Forum 22
死から生の価値を問い直す
2023. 9. 25



EAA Forum 23
History and Theory of
Common Spaces
2024. 4. 11



EAA UTokyo-PKU
Summer Institute 2023
2024. 4



東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, UTokyo

・info@eaa.c.u-tokyo.ac.jp
・https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp